

「がん一家」からのメッセージ

私は四人家族である。そして、その全員が「がん」に罹患した。特に主人は原発の異なるがんを二回経験した。私は「がん一家」と自称している。

家族の全員ががん患者である事などあるのだろうか。

平成28年 長女(33才)、子宮頸がん

平成29年 長男(29才) 甲状腺がん

平成29年 夫(68才) 胃がん

令和元年 夫(71才) 胆管がん

令和4年 筆者(68才) 右下葉肺がん

二人に一人が、がん罹患することとは、耳慣れていたが一家全員(4/4)がそうなることなど、どこにあるのか。

二人の子供から報告を聞いた私は、「若いのになんで?!」衝撃を受けた。つつい声荒げ、「そんなの早く取ってしまえば何ともないよ」と答えるしかなかった。二人とも早期発見だった。摘出手術だけで済んだ。その後、長男はホルモン剤等の投薬を継続している。長女の場合は定期検診、長男は職場の健康診断でわかった。

夫は胃がん、胆管がん共に人間ドックによりわかった。どちらの時も自覚症状がなく、食欲もあり元気で会社に通っていた。両親ががんて亡くなっていたことから、多少の覚悟をしていたが、やはり「来るべきものが来た」現実となればやはりショックを受けた。

胃は2/3を摘出したが、術後の治療は必要もなく、職場復帰できた。その三年後、会社の定期健診と人間ドックを同時期に受けた。その結果、肝機能の検査数値が異常に高値であり、胆管がんを告げられた。私は40年以上病院勤めをしていたことから、がんに対する多少の知識も持ち合わせていた。場所が悪い。生存率が低い。などなど頭に浮かんだ。

十二指腸、膵頭、胆嚢等胆管を取り巻く臓器の全て、または一部を摘出する必要があるという説明を受けた。12時間の手術。55日間の入院を要したが、再度会社勤めに復帰できた。幸いだった事は、膵頭十二指腸切除術ができる専門指導医に偶然出会えたことだった。当時それができる医師は県内に4人だけであった。

あれからまる4年が経過した。現在、中身のない凹んだお腹のまま

はあるが、再発や転移もなく一生懸命食べ、趣味であるゴルフや控えめの晩酌を楽しみに、米作りや野菜づくりなどに励んでいる。

最後に私にもとうとう順番が回ってきた。令和4年8月に受けた人間ドックで、右肺下葉にがんがみつかった。がんはごくごく初期で、手術時には場所の特定に苦労したくらいだった。部分切除した物は餃子一個くらいの大きさで、いわゆる「取りっぱなし」で済んだ。執刀医にも恵まれた。その医師は肺がん患者の侵襲を最小限にする手術を目指す、スパードクターだった。退院直後から通常の日常生活をおくっている。

私も夫婦は30年以上前から同じ病院で人間ドックを受ける事を年中行事としている。受診日が近づいて来ると、糖分やお酒を控え少し緊張する。そして結果報告が届くと恐る恐る封を開けてみる。その際に他科への紹介状など同封されている場合もある。年年歳歳、思いもよらない指導事項も一つずつ増えている。

家族全員のがんは、全て人間ドックや検診によりわかり、その全てが「早期」だった。一家で命の延長をもらえた。特に主人の胆管がんは一度目の胃がんが続く、二度目の新たな命である。心から有難い。一日いちにちに感謝しつつ大切に生きている。

がん治療も日々進化している。しかしその病名を告げられた時はやはり動揺し、「死」を意識した。しかし「早期」と聞き、その動揺も半減、先への希望も湧き治療にも積極的になれた。

定年退職後の年金生活を機に、人間ドック代を節約し受診を控えようかと考えた時もあった。しかし、今は本当にあの時、止めなくて良かったと思っている。継続して「早期発見」というご褒美をもらうことができた。

人間ドックは、自身や家族の人生の延長を可能にしてくれた。

この先、再発や転移の可能性も大いにあり得る。また、新たな異なる病気になるかも知れない。

ウイスキーの空き瓶は「ドック貯金」ボトルとなっている。来年の予約もできた。

決まり文句ではあるが「病気の治療は早期発見に勝るものはない」それが、私達一家四人の経験に基づいた、深い実感である。

皆さんにも「是非人間ドックを受けてほしい」という、「がん一家」からの強いメッセージを送りたい。